

死んでいい人間なんていない

富岡東高等学校 一年 松崎 栞音

まつしき しおん
(敬称略)

「私の弟は死んでいい人間なんかじゃない」声を荒らげて言いたい出来事が起きたのは、忘れることのできない、二〇一六年七月二十六日のことでした。神奈川県相模原市にある障がい者施設で元職員により、十九人もの入所者が殺害されるという痛ましい事件が起きました。その当時、戦後最大の大量殺人として、日本社会に大きな衝撃を与え、連日ニュースで報道されました。犯人は、「障がい者は不幸をつくることしかできない。いなくなればいい。」「意思疎通がとれないような障がい者は生きる意味がない」という勝手な独断と偏見で事件を起こしたのです。また、犯人は障がい者のことを、心を失っている「心失者」とも呼んでいます。

私には中学一年生の双子の弟たちがあります。「自閉症」という障がいがあり、現在は特別支援学校に通っています。言っていることは理解できませんが、会話はできません。生活をするのにも常に援助が必要です。そして私の弟は、心を失っている心失者なのでしょうか？「いいえ！ちがいます！」数日前、私は高熱を出して夜寝込んでいました。するとそれに気づいた弟が私の側に座り、心配そうに顔を覗きこんで母が何度も弟を寝かせようとしても、私の側から離れようとしませんでした。一晩中、私の側に座り、私の手を握ってくれていました。これでも、私の弟は、心が失い「心失者」なのでしょうか？

弟の通う特別支援学校のお友達だって同じです。弟が体調不良で学校を休んだ時、担任の先生にクラスのお友達が、「今日も、たいちゃんお休みかなあ？やっぱり五人一緒じゃないときみしいね。」と言ってくれたそうです。教室移動の際も、なかなか足が進まない弟を、お友達は弟の気分が乗るまで待ってくれているそうです。心が無いどころか、心配りのできるとても優しいお友達です。死んでいい人間なんて誰一人いません。皆、平等に神様から頂いた大切な命です。

母は、ニュースで事件を知った時、弟と被害者が重なってみえたのかもしれません。「こんな人がいるから、子供よりも一分一秒でも長生きしたい」と言いながら身体を震わせ泣いていました。その姿は今でも忘れることはできません。私も、事件後、暫く恐怖から逃れられませんでした。

「支援学校にやまゆり園の犯人みたいな人がきたらどうしよう」「放課後等デイサービスにも、犯人みたいな人が現れたら。」

何故、そんな恐怖心に襲われたかというのと、事件後、犯人をヒーロー扱いする声の後を絶たなかったのです。「よくやった！」や「労いの声をかけたい」「応援してるので、差し入れしたい」等、耳を塞ぎたくなくなるような内容ばかりでした。「こんな人達がいれば、いつ同じような事件が起きてもおかしくない」そう思うと、私は堪えられなくなり、弟を私の胸の中にギュッと抱きしめ、一時も離れたくありませんでした。

そして、この事件で皆さんに考えて頂きたいことがあります。それは、被害者が「実名」ではなく、遺族の希望で「匿名」で報道されたことです。自分の大切な家族が、名前ではなく「甲A」や「乙B」等と呼ばれて何とも思わない家族はいません。自分自身が差別しているのではないか？きつと、遺族は自分を責めたと思います。そして、心の中で我が子や兄弟の名前を叫んだと思います。その時の遺族の気持ちを考えると、私はとてもやるせない気持ちになるのです。遺族が被害者の実名を公表しないことで、ネット等では誹謗中傷するコメントもありました。しかし、まだまだ障がい者に対する偏見や差別が根強く残る今の世の中で実名公表しない遺族のことは誰が責められるのでしょうか？あれから七年。人権作文を書く時は必ず「障がい」について書くようにしています。そのことで友達から「弟のことをネタにしてる」と言われ、悔しく悲しい気持ちになったこともあります。しかし、やまゆり園で亡くなった方や、亡くなった家族の方、弟に今私ができることは、障がいのある人への偏見や差別をなくすことです。その為には、私たち家族が、まずは発信していかなければなりません。誰一人社会から排除されていい人間なんていないということを。みんな同じ人間であるということを。